現代社会の人間関係の諸相

遠　藤　由　美
現代産業社会と人間関係研究班主幹
社会学部教授

柴　内　康　文
現代産業社会と人間関係研究班委嘱研究員
同志社大学准教授

内　田　由紀子
現代産業社会と人間関係研究班委嘱研究員
京都大学 こころの未来研究センター助教

はじめに

本稿では、「人間関係」は個人間の関係すなわち “interpersonal relationships” を指し示す語として用いる。最近、人間関係は人にとって、厄介で困難な課題の１つとなっているように見受けられる。人間関係に疲弊し傷つき、閉じこもってしまう者。怒りを心のダムにため込んで、ある日突然、それを決壊させてしまう者、マスコミなどでこのような人々が取り上げられるのは、必ずしも珍しいことではなくなった。職場では、仕事自体に加えて人間関係がストレス源になっているとされており、産業カウンセリング制度が既に多くの企業で導入され、これからの導入を検討しているところも増大しているらしい。キャンパスの中においても、ある演習に配属されたものの、他者との協同作業や交流に不安や脅威を感じ、教員やカウンセラーへの相談、あるいは休学や退学にまで至るケースなどが発生している。また、「人間関係」という語に対して、とっさに「怖い」「苦手」という否定的な語を連想する学生もいる。このような日常エピソードを拾い集めて考えるならば、まるで人間関係は、個人に苦痛や苦悩葛藤や対立をもたらし、ストレスを与える厄介もの、と思えてくる。無論、人間関係をまったく持たずに生

関西大学経済・政治研究所主催の公開講座（2007年５月16日）にて、「社会的資源としての人間関係の諸相」として現代産業社会と人間関係研究班で遂行している研究の中間発表をおこなった。本稿は、その一部をまとめたものである。

きることは不可能であり、生命の営みの開始時点から始まる母子関係にはじめとして、さまざまなタイプの人間関係の網の目の中に組み込まれて生き続けるのが人間である。したがって、人間関係は持たないわけにはいかないけれど、厄介で困難で重い課題とみなされ、人々にストレスや苦悩をもたらすものになっている現状があるように思われる。

しかし、このような人間関係＝厄介あるいは困難な課題という捉え方とはまったく正反対の見解を、これまで何人もの研究者が提唱してきた。たとえば、Argyle（2001）は、『幸福の心理学』と題する著書の中で、人間関係は幸福や他の指標で測定されるwell-beingに関わるとても強力な要因であり、おそらく、単一の要因としては最も重要なものであろう、と論じている。Hartup and Stevens（1999）は、子どもにとっても大人にとっても友人関係は極めて重要だと指摘している。また、Myers（1992）は、年齢、性、収入は人の幸福にはほとんど関係がないと述べ、さらに後には、親しい関係をどれほど結び、どれほど支援的関係を享受しているか、これが主観的に感じ取る幸福の規定因として最も重要である、と指摘している（Myers, 2000）。また、アメリカ合衆国のコミュニティや人間関係の崩壊が安全や生産性低下などのさまざまな社会問題の発生の真の原因であると、政治学者Putnam（2000）がその大著『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』で論じている。彼は、『輝く画面の前に受身で、独りぽっちに座って過ごす余暇時間を減らし、同胞たる市民と積極的につながる時間の増加が保障されるような方法を見いだそう。市民参加を阻むのではなく、それを強化するような新しい形態の電子的エンターテイメントとコミュニケーションを育てよう』と述べ、より深く繋がった濃い人間関係こそが社会問題を解決しより幸福な社会をそして人生を作りだすのだ、と提言している。つまり、これらの研究者たちは、人間関係はよい社会と人々の幸福を可能にする資源的価値があると説いている。

人間関係がストレスや他の諸問題のおおもとであるのか、あるいは反対に幸福の源であるのか、これはいずれか一方に決するべき問題ではない。なぜなら、どのような人がどのような人間関係を結び、そこからどのような意味を汲み取っているのか、一様ではないからである。したがって、人間関係がそれに関わる当の人に何をもたらしているかを明らかにするためには、どのような人がどのような人間関係をどのように結び展開しているのかを検討することがまず求められるのである。しかも、次に述べるように、特定の個人が有する特定の関係ではなく、そもそも人にとっての人間関係を考えるとき、それは時代によっても、概念が異なっているように思われる。人間関係のもたらすところを理解するためには、いうまでもなく現代の人間関係を対象としなければならない。

人間はかつて、ある所で生まれ、そこで育ち、生き、そして多くの場合、その地で果てた。時代が下ると、移動性があがり、たとえば、江戸時代のお伊勢参りのような享楽のため、あるいは商売のための旅行ができるようになり、よその地を通過し、その地の人と交わるということを経験できるようになったが、それでも移動（mobility）は制約や困難が伴うものであり、

基本的には生まれ育った地に根を下ろす形で、一生を過ごしたに違いない。ある個人に着目して考えるならば、これは、その人が人数的に限られた、安定的な人間関係または顔見知りの人間関係の中で生きることを意味する。親・親戚、親が関わりをもつ地域の人々の真ん中に生まれ、育ち、そこで働き、交流するわけである。したがって、多くの場合、人間関係は「所与」と考えられていただろうと思われる。しかしながら、地理的な移動性と社会的な移動性がともに増大した今日、私たちは、行こうと思えば比較的容易にどこかへ移動でき、また必ずしも好まずとも移動を求められ、隣に移動してきた人々が住み、日々の中で多くの人と接する機会をもち、膨大な情報の渦の中で浮遊するように生きている（Gergen, 1991）。そうした社会においては、人間関係は、「そこにあるもの」「自然に存在するもの」から、意識的に相手を選びつきあいスタイルや姿勢を決めて「作る」ものへ、変化してきているように思われる。事実、昨今、大学の入学式において、総長や学長が、友人づくりを学生生活の目標とするよう、積極的に推奨している（例：宇都宮大学平成19年度入学式学長式辞）。

人間関係は「絆」とも表現される。これは通常、「きづな」と読み、辞書（広辞苑第５版）によれば、「断つにしのびない恩愛。離れがたい情実」を表し、「きづなで結ばれた中」などと、あたたかいものをはぐくむ親密な人間関係を表すものとして用いられる。他方、絆（きづな）という漢字は、「ほだし」「ほだ」とも読まれ、つなぐもの、縛るものという意味合いももつ。この漢字の起源は、馬や牛などの動物をつなぎとめておく綱、にある。杭に繋ぎ止められ拘束される動物の立場に立つならば、絆は自由を損なう負の側面をもつかもしれない。人間関係も同様に、その持ち方・結び方によって、あるいはある人間関係をどのようにとらえるかによって、そこに関わる人に何をもたらすか、あるいは人がそこから何を得るかが異なるに違いない。とくに、自ら作り出すものとしての人間関係を考えるならば、それに積極的な人とそうでない人の間には、人間関係の量的・質的な側面で種々の違いが存在するに違いない。さまざまな人間関係の働きをこのように分かつものは何か、これを明らかにすることが、我々の大きな目的である。これまで、ある具体的な人間関係、たとえば、友人関係やサポート関係などについての研究は数多くなされてきたが、より広範な人間関係を取り上げた研究はあまり見あたらない。

本稿では、「現代社会の人間関係」に関する研究において、現時点までに収集された資料を基に、人々はどのように人間関係を結び、それを維持し、どのように関わっているのかという点に焦点をあて、特に性別による違いがあるかどうかについて検討する。人間関係においては、その目標とするところ、活動の仕方など、さまざまな点において、性差があることが指摘されている（Coldwell & Peplau, 1982; Reis, 1998）。よって、本稿では、大学生を調査対象とし、人間関係の保有数や交流の仕方などにおける性差を検討する。

調査方法

(1)　調査対象者と地域

4年制共学の国立大学2校、私立大学3校に在籍する大学生を調査対象とした。回答が得られたのは454名（男187名、女267名）で、年齢は18から33歳の間に分布し、平均年齢は20.44歳（SD＝1.58）であった。

(2)　調査用紙の構成

調査用紙はまず冒頭で、回答結果は研究のためだけに使用することを明記し、協力を依頼した。その後、フェースシート項目として、性別、年齢、暮らし形態（一人暮らし、家族と同居、その他）、現在地での居住年数、現在に至るまでの引っ越し回数を設定した。

対人効力感を測定するため、Uchida, Kitayama and Park（2007）を参考に、次の4項目を設定した：①人と交流するとき、私はいつも相手のペースに巻き込まれてしまう(*)、②対人関係の中で生じるおおかたの問題に、対処できる方だと思う、③人間関係の中で予期せぬ問題が生じてもうまく処理できない(*)、④社会的場面でうまく行動する能力について、自信をもっている。自分の人間関係に対する評価は、「私は人間関係にめぐまれている方だと思う」という項目によって測定した。これらの項目では、それぞれ1（まったくあてはまらない）～5（非常にあてはまる）までの5段階評定で、回答を求めた。

人間関係の持ち方に関する項目として、関わりのあるグループ、さまざまな活動の対象となる個人数について尋ねた。より具体的には、グループについては、自分の意思で参加しているグループ数、参加が当たり前だから関わりをもっているグループ数、居心地がよく会うのが楽しみなグループ数、居心地がよいとは言えず積極的に会いたいとは思わないグループ数について、それぞれ実数の記入を求めた。また諸活動の対象となる個人については、挨拶を交わす人、うれしいことがあったときに知らせたい人、悩んだときや困ったときに話を聞いてもらいたい人、活動を共にする人について、それぞれ実数で回答を求めた。

最後に、日常の交流度を検討するために、携帯電話でのメール利用、携帯電話での電話、そして携帯電話機に登録されている人の数について尋ねた。前者の2項目については、1（週あたり10回以上）、2（6～9回くらい）、3（3～5回くらい）、4（1～2回くらい）、5（ゼロまたは使わない）の5つの選択肢から1つ選択するように要請した。登録数については、携帯電話機を見て、その実数を記入するように要請した。

結果と考察

複数の項目で構成される対人自己効力感（４項目）は、それぞれ逆転項目の方向をそろえた上で、尺度信頼性係数 α を全サンプルを用いて算出した。その結果、対人自己効力感は $\alpha = .74$ となり、対人自己効力感はやや低めであったが、十分許容できる数値であると判断し、それぞれ合計得点をもって、対人効力感の各スコアとした。

１．人間関係の諸相と性の要因

(1)　参加グループについて

どのような集団と関わりをもっているか、そしてそれには性の要因によって違いがあるかを検討した。集団数に関する各質問項目に対して、男女別に平均値を求め、t 検定を実施した。各項目の男女別平均値および標準偏差は表１に示したとおりである。自分の意思で参加しているグループ数は、男性より女性の方が多い（$t = 3.77$, $df = 452$, $p < .001$）[1)]。次に、「参加するのが当たり前だから参加しているグループ数」について尋ねた結果、性による違いは見られなかった（$t < 1$, ns）。両者の合計をもとめて、関わりのあるグループ数を男女別で比較したところ、男性の平均は5.28（$SD = 2.19$）、女性の平均は6.02（$SD = 2.49$）で、女性の方が有意に参加グループ数が多かった（$t = 3.25$, $df = 450$, $p < .001$）。「とても居心地よく、会うのが楽しみなグループの数」では、有意な主効果がみられ、男性より女性の方がより多かった（$t = 3.45$, $df = 451$, $p < .001$）。反対に、「あまり居心地がよいとはいえず、積極的に会いたいとは思わないグループの数」では、性別の効果は見られなかった。

これらのことから、性の要因が、関わりをもつグループ数、楽しみの源としているグループ数の違いをもたらし、いずれも男性よりも女性の方が、それらを多く保有していることが示唆される。積極的に会いたいと思わない不快なグループ数は、いずれも平均が１個前後と少なく、性による違いは認められなかったが、これは、人はそもそも、つきあうことに価値を見いだせない場合、あるいは積極的に回避したいと考えるような場合は、そこに時間・エネルギーなどの資源を振り当てないようにするのかもしれない。Leary and Baumeister（2000）は、人間は時間・エネルギーなどの資源が限られているために、それらを得るものが少ない関係に投入するのは、適応的ではないと述べている。たとえば、職場の人間関係が苦痛と感じている場合、もし可能であれば、別の職場に変わることを考えるかもしれない。そうすることによって、苦悩し、それに対処するために費やしていたコストを、より何が得られる他の人間関係へと振り向けることが可能になるであろう。この調査から示唆されるのは、居心地のよくないグループに参加する程度は、居心地のよいグループ参加よりもはるかに少なく、おそらくは最小限に留

1）欠損値は分析から除外した。そのため、有効データ数は、各分析によって異なる。

めているだろう、ということである。

表１　男女別によるグループへの参加状態の平均数（標準偏差）

質　問　項　目	男	女
自由意思参加グループ数	3.32（1.77）	4.00（1.98）
非意思的参加グループ数	1.96（1.18）	2.01（1.22）
心地よいグループ数	2.90（1.77）	3.53（1.98）
心地よくないグループ数	1.05（1.15）	.91（ .94）

(2)　さまざまな交流相手

どのような交流相手を、どの程度保有しているかを検討した。ここでも、性要因を組み入れた分析を実施した（平均値は表２に示した）。まず「挨拶をする人」は、比較的浅い人間関係を示す指標となりうると考えられるが、分析の結果、性別は効果をもたず（$t<1$, ns）、平均は30～39人程度であった。標準偏差が大きく、個々人による違いが伺える。おそらく、パーソナリティ要因、周囲の環境などさまざまな要因による影響があるものと思われる。「うれしいことがあったときに、知らせたい人」においては、男性より女性の方がそのような他者を多く保有する傾向があった（$t=1.67$, $df=441$, $p<.1$）。「悩んだ時や困った時に、話を聞いてもらいたい人」では、男性より女性の方がそのような他者を多く保有していた（$t=3.94$, $df=441$, $p<.001$）。これらの２つの項目は、親密な関係の相手について自己開示の程度を測定していると考えられる。興味深いことに、「悩みを聞いてもらいたい」関係他者の方が、「うれしいことを知らせたい」関係他者よりも人数が少ない（対応のあるt検定で、$t=9.40$, $df=441$, $p<.001$）。このような違いは、「悩み…」の方がより深い自己開示であることを示唆しているのかもしれない。そうであれば、女性の方が男性に比べて、個人的な深い自己開示をできる関係他者をより多く保有していることになる。「休日などに一緒に時を過ごしたり、活動を共にしたりする人」では、男女の違いは認められなかった（$t<1$, ns）。一般に、女性は同性の友だちと感情や私的なことを開示しあい相互の情報を持っているのに対して、男性は友だちと一緒に活動する、とされている（e.g., Caldwell & Peplau, 1982）。本稿の結果、感情共有では性差が認められたが、活動の共有性では性差は認められなかった。

表２　男女別、交流相手の平均値（括弧内は標準偏差）

項　目	男　性	女　性
挨拶をしあう人	38.14（57.50）	35.92（40.61）
うれしいことがあったとき、知らせたい人	7.05（ 9.11）	8.41（ 8.01）
悩みや困ったことを、聞いてもらいたい人	3.75（ 2.89）	4.95（ 3.31）
休日などに一緒に時を過ごしたり、活動を共にしたりする人	7.46（11.19）	6.63（ 5.59）

(3)　人間関係相手との交流の強さ

ここでは、１番重要な友人グループと親戚関係に着目し、それぞれ、構成人数や会う頻度、親しいと感じるメンバーの人数、親しくないと感じるメンバーの数について尋ねた。結果は表３に示した。友人グループと会う頻度については、女性の方が男性よりもグループのメンバーたちとより頻繁に会合する傾向のあることが明らかになった（$t=1.78$, $df=430$, $p<.1$）。また、１番重要な友人グループを構成している人数では性差は認められなかったが（$t=1.32$, $df=429$, ns）、その中の何人を親しいと感じるかについては、男性の方が女性のそれを上回り、（$t=2.05$, $df=430$, $p<.05$）、重要な友人グループに親しい友をより多く保有していた。同じそのグループの中の何人を「親しくない」と感じるか、という質問に対しては、性差は有意にならなかった。

次に親戚グループについても、友人グループと同様の質問をおこなった。その結果、親戚グループの規模では男女差がなく、会う頻度は男性の方が女性より少なかったが（$t=2.06$, $df=418$, $p<.05$）、友人グループと同様に、男性の方が女性よりより親しいと感じる人が多く（$t=3.02$, $df=413$, $p<.01$）、親しくないと感じる人が少なかった（$t=2.29$, $df=407$, $p<.05$）。このことは、男性は血縁に基づく人間関係および友人関係の中で親しいと感じている人数が多いことを示している。先行研究において、このような違いが報告された例は寡聞にして、ほとんどないと思われる。本調査は、広範な人間関係を検討することによって、このような違いをみいだした。この結果が何を意味しているかここからは明かではないが、興味深い結果ではある。ひとつの可能性としては、これはグループの中の親しい人数を尋ねており、女性はより個別の相手と親密な関係を結ぶのに対して、男性は集団を形成して、その中に親しい相手を保有するのかもしれない。

表３　男女別人間関係相手との交流の強さ

項　　目	男　性	女　性
１番重要な友人グループの人数	8.07（7.88）	7.07（7.64）
その中の「親しい」と感じる人数　（友人）	5.59（4.21）	4.83（3.51）
その中の「親しくない」と感じる人数（友人）	1.43（3.89）	.99（2.73）
１番重要な親戚グループの人数	8.69（5.82）	8.64（5.60）
その中の「親しい」と感じる人数（親戚）	5.31（4.43）	4.13（3.54）
その中の「親しくない」と感じる人数　（親戚）	2.23（3.90）	3.26（5.17）

(4)　人間関係の持ち方についての自己評価

人は自分の人間関係の持ち方をどのように評価しているのだろうか。ここでは、４項目で構成された対人効力感と「人間関係には恵まれている方だ」について、検討した。対人効力感では性別の効果は有意ではなかったが、「恵まれた人間関係」項目においては、性の効果が見ら

れ（$t=3.76$、$df=451$, $p<.001$）、男性（$M=3.66$, $SD=1.01$）よりも女性の方（$M=4.01$, $SD=.93$））が自分の人間関係を高く評価していた。この２つの測度はどちらも人間関係の持ち方への自己評価を表していると考えられるが、意味するところは異なるようである。すなわち、対人効力感は、対人関係の中で生起した問題への対処能力やそれへの自信を問うものであった。これに対して、「恵まれた人間関係」項目は、自己の主体的関わりや能力などを含意として含んでいない。特別の努力やスキルを必要としないような「気のあう」人たちとの交流があれば、「人間関係に恵まれている」と実感されるのかもしれない。それゆえ、深い自己開示できる他者や親しいと感じる友人をより多く保有している女性の方が、「人間関係に恵まれている」と感じているのだと考えられる。

(5)　コミュニケーションと対人関係

ここでは、対人効力感および「人間関係に恵まれている」とコミュニケーション手段の利用頻度の関係を検討した。まず、対人効力感を中央値に基づいて男女別に高群と低群に分け、携帯電話の週当たりの利用頻度とのクロス集計をおこなった。その結果、男性では有意となり、高群と低群では利用頻度の分布に偏りがあり、対人効力感の高群は携帯電話の利用が多かった（$\chi^2=15.04$, $df=4$, $p<.005$）。女性ではそのような関係は見られなかった（図１ab）。電話メールの利用頻度においては、男性と女性ともに対人効力感による違いが見られ（順に、$\chi^2=15.03$, $df=4$, $p<.005$；$\chi^2=11.67$, $df=4$, $p<.02$）、いずれに対人効力感高群のほうが、週当たりの利用頻度が高かった（図２ab）。

我々は、挨拶する人数や携帯電話番号登録件数についても検討した。その結果、挨拶する人数では、男女とも、対人効力感の高群と低群の間に違いがみられ（男性：高群$M=47.97$, $SD=70.59$、低群$M=26.56$, $SD=33.39$；$t=2.55$, $df=181$, $p<.05$；女性：高群$M=43.33$, $SD=50.86$、低群$M=28.52$, $SD=24.71$；$t=2.98$, $df=256$, $p<.01$）、いずれも対人効力感の高い人の方が挨拶する関係にある他者が多かった。携帯電話番号登録件数では有意な違いが認められ、いずれも、高群の方が低群よりも登録件数が多かった（男性：高群$M=134.34$, $SD=84.31$、低群$M=90.10$, $SD=61.43$；$t=4.04$, $df=184$, $p<001$；女性：高群$M=168.39$, $SD=92.50$、低群$M=137.33$, $SD=71.86$、$t=3.04$, $df=261$, $p<.003$）。さらに、相関係数の検討においても、対人効力感と携帯電話番号登録数は、男性で$r=.276$***、女性で$r=.224$**、挨拶する人間の数においては、男性で$r=.200$**、女性で$r=.165$**と有意な関係がみられた。対人効力感は挨拶する人数や先端テクノロジーを用いたコミュニケーション頻度と関係していることが判明した。

「人間関係に恵まれている」についても同様に、携帯電話および携帯メールの利用頻度とのクロス集計を実施した。その結果、男性では、人間関係に恵まれていると思っている度合いが強い人ほど、携帯電話と携帯メールの利用頻度が高かった（順に、$\chi^2=28.04$, $df=16$, $p<.05$; $\chi^2=54.75$, $df=16$, $p<.001$）。女性では、携帯電話の利用頻度は人間関係に恵まれていると思

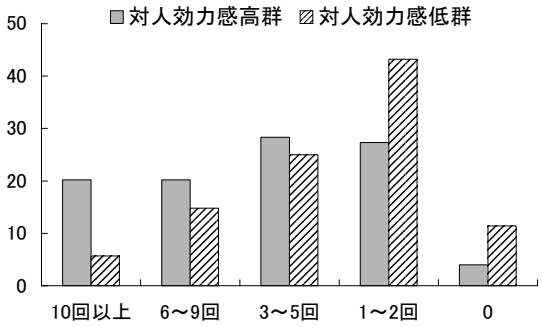

図１ａ　男性における対人効力感と携帯電話コミュニケーション回数／週

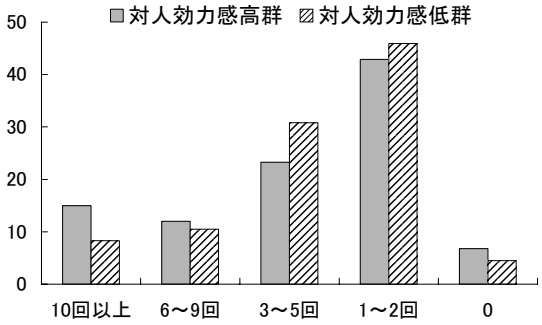

図１ｂ　女性における対人効力感と携帯電話コミュニケーション回数／週

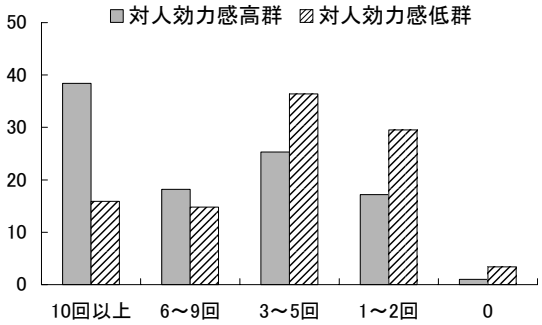

図２ａ　男性における対人効力感と携帯電話メール利用回数／週

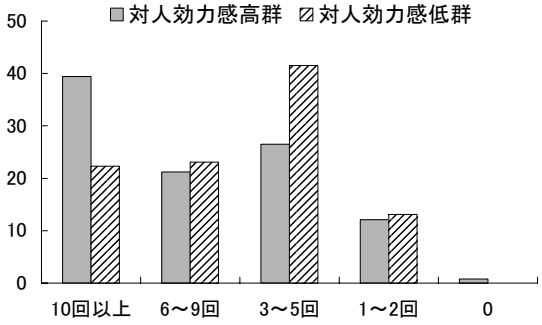

図２ｂ　女性における対人効力感と携帯電話メール利用回数／週

っている度合いと関連がなかったが、携帯メール頻度は関連が見られる傾向にあった（χ^2= 24.79, df = 16, p< .07）。なお、「人間関係に恵まれている」と考える程度と携帯電話やメールの利用との関係は、対人効力感のそれと全体的パターンは類似しているので、ここでは図示は省略するものとした。

このような結果から、対人効力感を抱くあるいは人間関係に恵まれていると思う程度は、挨拶をしたり、頻繁に連絡が取り合えるような関係他者をどの程度もちどれほど接触しているか、と関連していることが伺える。携帯電話などの現代的コミュニケーション・ツールは、私は他者とうまく交流ができるという感覚を抱かせることに資するようである。

まとめ

ここでは、現代社会における人間関係の結び方はどのようなものであるのかについて検討した。先行研究により、性別によって人間関係の保有の仕方が異なる可能性が考えられたため、性の要因に焦点をあてながら、交流をもっている人間関係の範囲や規模、交流実績の程度、交流人間関係に関する主観的評価などについて、大学生から回答を得、それぞれの平均値などを解析した。

その結果、まず、顕著な性差が得られ、男性に比べて女性の方が親密な他者との関係をより多く保有しており、自分はよい人間関係に恵まれていると考える程度が高かった。しかし、数量的な性差もさることながら、交流の仕方の質的な面での違いも見出された。男性はグループ内に友人を保有する一方、女性は深い自己開示をする他者を男性より多く保有しているにもかかわらず、友人グループ内の親しいと感じる他者の人数は男性のそれよりも少なく、むしろ個人レベルで友情を育むことが示唆された。

現代的コミュニケーション・ツールとしての携帯電話や携帯電話メールに関しては、対人効力感や人間関係に恵まれているなどの項目において、より高い評価をする者ほど、その利用が多く頻繁であることが示唆された。一般に言われるように、友人のいない者や他者とうまく付き合えない者がメールなどを用いて、匿名の他者と擬似的人間関係を結ぶ、という傾向とは逆の結果であり、通説を支持するような結果は得られなかった。

まとめるならば、人間関係の展開の仕方や人間関係に対する評価には性差があること、女性は男性よりも人格的な結びつきをする傾向があること、そして、人間関係に対する自己評価（自分は人間関係に恵まれている、対人効力感）は、実際にコミュニケーションを取る頻度と関連があること、これらを本研究結果は示唆していると考えられる。

引用文献

Argyle, M. 2001 *The psychology of happiness* (2nd ed.), New York: Routledge.

Caldwell, M. A., & Peplau, L. A. 1982 Sex differences in same-sex friendships. *Sex Roles*, 8, 721–732.

Gergen, K. J. 1991 The saturated self. Basic Books.

Hartup, W. W., & Stevens, N. 1999 Friendship and adaptation across the life span. *Current Directions in Psychological Science*, 8, 76–79.

Myers, D. G. 1992 *The pursuit of happiness: Who is happy and why*. New York: Morrow.

Myers, D. G. 2000 The founds, friends, and faith of happy people. *American Psychologist*, 55, 56–67.

Leary, M., & Baumeister, R. F. 2000 The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. Zanna (Ed,), *Advances in experimental social psychology,* vol.32, pp.1–62. San Diego: Academic Press.

Putnam, R. M. 2000 The collapse and revival of American community. 柴内康文訳 2006. 『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。

Reis, H. T. 1998 Gender differences in intimacy and related behaviors: Context and process. In D. J. Canary & K. Dindai (Eds.), *Sex differences and similarities in communication*, Pp. 203–231. Mahwah, NJ: Erlbaum.

Uchida, Y., Kitayama., S., Park, J. (2007). Implicit and explicit self-construals in Japan and the United States. Unpublished Manuscript, Koshien University.